法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2025-05-03

大学史の一側面 ： 法政大学の教授陣と「カント・コレクション」

牧野, 英二 / MAKINO, Eiji

(出版者 / Publisher)
HOSEIミュージアム
(雑誌名 / Journal or Publication Title)
HOSEIミュージアム紀要 / BULLETIN OF HOSEI UNIVERSITY MUSEUM
(巻 / Volume)
1
(開始ページ / Start Page)
7
(終了ページ / End Page)
22
(発行年 / Year)
2021-03-12
(URL)
https://doi.org/10.15002/00025082

＜研究論文＞

大学史の一側面：法政大学の教授陣と「カント・コレクション」

牧野 英二

はじめに

本学は、前身の東京法学社が1880年（明治13年）に創設され、1918年(大正７年）に大学令公布により、1920年（大正９年)、和仏法律学校法政大学から旧制大学令に基づく法政大学として新たなスタートを切った。そして1922年(大正11年)に、法学部が法文学部に改組され､文学科と哲学科が新たに加えられた。

したがって文学部は、2022年に創設100周年を迎える。その間、本学・本学部は、予科とともに夏目漱石門下の和辻哲郎、安倍能成、森田草平、小宮豊隆、内田百閒、野上豊一郎等の＜漱石山脈＞と呼ばれた多彩な人脈によって教育と研究の両面で支えられてきた。特に大正教養主義の時代には、イマヌエル・カント（Immanuel Kant,1724-1804）を中心とするドイツ哲学の研究が日本の学界では盛んになり、本学の教授陣は、その一翼を担っていた。そしてこの伝統は、その後の昭和、平成、そして令和の時代に至っても着実に継承され、斯学の研究の発展と研究者の育成、学生の教育に大きく貢献している。

筆者もまた、こうした本学の伝統の中で学部及び大学院の研究教育に携わり、平成最後の年2019年３月に退職した折､「ＨＯＳＥＩミュージアム」に「カント・コレクション」を寄贈した。そこで、この機会に、法政大学の歴史を回顧しつつ、カント哲学の翻訳・研究に携わってきた本学の教授陣の業績を紹介してみたい。

1．本学の教授陣とドイツ哲学・思想との関係―カントからマルクス・新カント学派・21世紀のカント哲学研究の一断面―

明治初期を別にすれば、明治時代から大正期まで日本の哲学研究は、ドイツ哲学、特にカント哲学研究が支配的であった。しかも日本のカント哲学研究は、新カント学派の影響下でのカント受容とカント解釈であった。そのため、カント自身の著作が翻訳される以前の段階で、多数の新カント学派の著作･カント研究書が翻訳･紹介される結果となった。この点に、日本の哲学研究及びカント哲学研究上の制限や課題を残した。要するに、日本のカント研究は、新カント学派のフィルターを通して進められたわけである。こうしたカント研究の特徴や哲学研究の課題は、今日に至るまで日本の哲学研究やカント哲学研究についても、依然として見られる普遍的な現象である。もっとも筆者の認識では、新カント学派の正確な理解と研究がどこまで進んでいたかは、いささか疑問が残る。

さらに、明治期のカント哲学や西洋哲学全般の受容・翻訳・紹介が、同時に中国語文化圏、特に清末及び中華民国時代の政治家や思想家、学者、留学生などに、日本語文献によって一定の影響を与えていた点にも留意すべきである。当時の中国人による西洋思想の受容史についても、日本の哲学、特にカント哲学の翻訳・紹介の成果が、中国人に大きな影響を与え、彼らの伝統思想との錯綜した関係のなかで、中国の近

代化と彼らの思想的アイデンティティの模索の営みに反映していた。

一方、大正教養主義を支えた日本の知識人・大学教授のなかでも、本学の教授陣は多くの執筆活動を通じて、学生や大衆、研究者に影響を及ぼした。本学の経済学部を含む人文・社会科学系学部の教授陣の活動ぶりには、当時の官立大学の教授陣と比較して遜色なく、目を見張るものがある。特に現在、大原社会問題研究所に所蔵されているカール・マルクス（Karl Marx,1818-1883）著『資本論』（*Das Kapital. Kritik der politischen Oekonomie,* Erster Band. Hamburg 1867）の著者署名入初版本の存在とマルクス主義及び労働問題に対する研究の成果は、その象徴とも言えるであろう。

大正時代のカント研究の大きな特徴としては、カントとマルクス及びマルクス主義との関係を扱った論文や著作及び翻訳の刊行にある、と言ってよい。1917年（大正6年）にロシア革命が勃発し、日本のカント研究にもその思想的影響を及ぼした。シュルツェ・ゲーヴァニッツ（Schulze-Gävernitz）『マルクスかカントか（*Marx oder Kant?,*1909）』（大鐙閣、佐野学訳、1920年）、A．デボーリン（Abram M. Deborin）『カントに於ける弁証法（*Die Dialektik bei Kant*,1926）』（弘文堂、宮川実訳、1926年）、土田杏村「カント哲学と唯物史観」（『中央公論』1924年12月）が刊行されている。また昭和時代に入っても、オスカー・ブルーム（Oskar Blum）『マルクス化とカント化（Max Adlers Neugestaltung des Marxismus,in: *Carl Grünberg's Archiv für die Geschichte des Sozialismus und der Arbeiterbewegung.*8 Jahrgang.1919,S.177-247.）』（同人社、波多野鼎訳、1927年）、マックス・アドラー（Max Adler）『カントとマルクス主義（*Kant und Marxismus,*1925）』（春秋社、井原紀訳、1931年）カール・フォアレンダー（Karl Vorländer）『カントとマルクス（*Kant und Marx,* 2 Aufl.1926）』（岩波書店、井原紀訳、上、1937年：下、1938年）などが刊行されている。

新カント学派に属するマールブルク学派の学者たちは、カント哲学のうちに社会主義の理念を見出し、カントを社会主義の祖とみなす動向も見られた。日本国内でも、桑木厳翼「カント哲学と共産主義の理論」（『丁酉倫理会講演集』第275輯　大日本図書株式会社、1925年）や湯沢睦雄『マルクス乎カント乎』（湯沢睦雄刊、1933年）などの論考にみられるように、当時の社会的状況の要請もあり、カント哲学の研究者や新カント学派の哲学者たちは、マルクスやマルクス主義との連携やカント及びマルクスとの対決を求められたのである。ちなみに、日本を代表する独創的な哲学者・西田幾多郎は、1936年（昭和11年）にマルクスの『資本論』を書店に注文するなど（『西田幾多郎全集』第17巻（旧版）、岩波書店、「日記」pp.545-547.）、マルクスに対する並々ならぬ関心を抱いていた。三木清は言うまでもなく、本学の経済学研究者がドイツ留学を果たし、マルクス研究やマルクス主義研究に精力的に取り組み、『資本論』の初版本をはじめ、多くの貴重な関連文献を日本に持ち帰ってきたことも、こうした時代状況と深くかかわっている。

ところで、第二次大戦後の哲学の主潮流は、グローバルな地政学的影響の下で、日本でも、マルクス主義・実存主義・分析哲学が凌ぎを

削る状況がしばらく続いた。その後、1989 年 11 月、ドイツ・ベルリンの壁崩壊後の時代には、日本でも、ポストモダンの思想的影響などにより、様々な哲学的立場が入り組みながら、カント哲学に対する研究や翻訳・紹介が、新たな方法論の下で読み直されるようになってきた。ちなみに、評論活動で精力的に活躍している本学旧教養部教授を務めた柄谷善男（行人）の 1990 年代以降の論考には、『トランスクリティック　カントとマルクス』（批評空間社、2001 年）があり、彼はカントとマルクス、そしてフロイトを繋げる試みを行っている。カントをマルクスやフロイトの思想と関係づける研究方法は、ドイツの新カント学派の哲学者には珍しいことではない。『啓蒙の弁証法』（*Dialektik der Aufklärung,*1947 Amsterdam）を執筆したホルクハイマー（Max Horkheimer,1895-1973）及びアドルノ（Theodor Adorno,1903-1969）の師ハンス・コルネリウス（Hans Cornelius,1863-1947）のゲシュタルト心理学に依拠したカント解釈も、その一例として指摘することができる。

21 世紀には、後述のように、筆者を含む本学哲学科の教授陣がカント研究書の刊行やカントの原典や欧米のカント研究書の翻訳活動に大きな実績を挙げてきた。そこで以下では、この論点に焦点を絞って具体的に研究成果を紹介していきたい。

2. カント生誕 200 年記念と岩波版『カント著作集』の刊行―漱石山脈、戸坂潤、三木清、谷川徹三まで―

本学とドイツ哲学との関係には、他大学にはない幾つかの顕著な特徴がある。哲学科教授陣の研究業績に絞った場合、際立った特徴としてドイツ哲学の研究に携わった教員は、今日に至るまで岩波書店やカント哲学との関わりが深いことが指摘できる。

哲学科創設期以降のドイツ哲学との関わりとしては、当時の教授陣の要であった安倍能成による著作『カントの実践哲学』(岩波書店、1924 年) がある。安倍は、本学退職後、カント生誕 200 年の 1924 年に照準を合わせた岩波書店の企画･『カント著作集』では『宗教哲学』(1932 年) の個人訳以外に『道徳哲学原論』などを手がけた。戦前から戦後まで哲学科講師や教授を務めた佐藤信衛も『美と崇高との感情性に関する観察　其の他』(1939 年) に収録された論文を四篇翻訳した。これらの翻訳もまた『カント著作集』に収録された。

安倍と同じ時期に哲学科教授を務めた和辻哲郎は、ドイツ留学中にマルティン・ハイデガー（Martin Heidegger 1889-1976）の主著『存在と時間』(*Sein und Zeit,* Max Niemeyer1927) を読み、帰国後『風土』(岩波書店、1935 年) や『カント実践理性批判』(同、同年) を執筆している。和辻は、『風土』及び『人間の学としての倫理学』(岩波書店、1934 年) では、ハイデガーなどに代表される西洋哲学における時間重視・空間軽視の思想と、西洋哲学における人の学としての倫理学を批判した。カント哲学に対しても、和辻は、『人格と人類性』(岩波書店、1938 年) の「カントにおける「人格」と「人類性」」中で、カント哲学のうちにも身体軽視の思想を見出し、こうした観点からカント倫理学の制限とともに新たな倫理学の在り方、「人間の学としての倫理学」を提唱している。

和辻の西洋哲学との対決の姿勢は、本学所蔵

の和辻文庫に所蔵されているカント、ヘーゲル、マルクス、ディルタイ、新カント学派その他のドイツ哲学者の原書の欄外に記した膨大な量の書き込みやメモ類を見れば、一目瞭然である。例えば、カント著『実践理性批判』の原書やマルクス著『資本論』第1巻の原書と訳書には、多くの批判的な書き込みが見られ、特に和辻の厳しいマルクス批判の観点を読み取ることができる。ところが、カッシーラー版『カント全集』第4巻に差し込まれたメモには、それまでのカントに対する批判とは逆の評価を表す「▲ところで、カントをよみ返して、すっかり考えが変わった」という文章が記されており、カントや和辻のカント解釈に関心のある読者には興味が尽きないであろう（拙著『増補・和辻哲郎の書き込みを見よ！』法政大学出版局、2010, pp.57-102.）。

和辻の退職後に後任として迎えられた山内得立には、新カント学派のリッケルト『認識の対象』(同、1938年)の訳業や著作の『現象学叙説』（同、1929年）などがある。安倍・和辻という看板教授の退職後教壇に立った河野与一は、『ライプニッツ形而上学叙説』（同、1925年）や『ライプニッツ単子論』(同、1928年)を、矢崎美盛は『ヘーゲル精神現象論』(同、1936年)などを刊行した。ちなみに、哲学科卒業生の布川角左衛門は、在学中、河野与一に世話になり、伊藤吉之助の授業に出席した時のトラブルめいた思い出も語っている。卒業後、岩波書店に就職した布川は、彼らや三木の著訳編書を手掛けた。さらに布川は、東畑精一とともに豊多摩刑務所で獄死した三木の遺骸を引き取りにいった人物である。また、一時期哲学科の教壇に立った金子武蔵は、ヘーゲル『精神の現象学』(同)の改訳を数次にわたり刊行している。彼は、戦後別の出版社から『カントの純粋理性批判』（以文社、1974年）という著作も刊行した。

1927年に哲学科教授となった三木清（1897-1945）は、ドイツ滞在中（1922-1925）、リッケルトやハイデガーの下で最新の哲学研究を吸収していた。岩波書店の社主・岩波茂雄の財政的援助によりヨーロッパに留学し、当初は新カント学派の西南ドイツ学派の哲学者であったリッケルトについて学び、まもなく物足りなさを感じた三木は、新進気鋭の哲学者マルティン・ハイデガーの存在論・解釈学的哲学を学ぶとともに、ヨーロッパのマルクス主義の最新動向からも影響を受けた。帰国後、三木は、矢継ぎ早に「人間学のマルクス的形態」「マルクス主義と唯物論」「プラグマチズムとマルキシズムの哲学」を雑誌『思想』（岩波書店刊）に発表して、その後執筆した「ヘーゲルとマルクス」とともに『唯物史観と現代の意識』（岩波書店、1928年）を公刊した。三木は、1930年（昭和5年）に治安維持法違反の疑いによって検挙され公職に就くことが出来なくなり、マルクス主義研究とも一定の距離を取らざるを得なくなった諸事情も重なったが、彼の一貫した研究テーマでもあった歴史哲学的な研究の成果として本格的な体系的著作『歴史哲学』（1932年）を刊行した。その後、三木はいわゆるジャーナリズムを主たる活躍の場としたが、卒業論文でカント哲学を手掛かりに「批判哲学と歴史哲学」（大正9年/1920年9月）を執筆して以来、『構想力の論理』にいたるまで、カントは、三木にとって哲学的対話及び対決の相手であり、そして三木清が克服すべきライバルともいうべき哲学者のひとりであった。

しかし三木は、第二次世界大戦の敗戦後の9月26日に獄中で亡くなったため、主著『構想力の論理』(岩波書店)は、未完で終わっている。この書は、特にカントの『判断力批判』における構想力及び天才や技術の概念の影響を受けている。また彼の業績は、弟子で本学の教授も務めた枡田啓三郎の編集により『三木清著作集』(同、全16巻、1946-51年)『三木清全集』(同、全19巻、1966-68年。二刷全20巻、1984-86年)として刊行された。キェルケゴール研究者の枡田啓三郎には、カント『純粋理性批判』の翻訳(河出書房、1956年、高峯一愚・元日本カント協会委員長との共訳)もある。

三木清が治安維持法違反の容疑で検挙され1931年に辞職したのち、彼の後任として着任した哲学科教授の戸坂潤(1900-1945)もまた、1935年に唯物論研究会などのマルクス主義的思想活動により再度検挙され、三木と同年の1945年8月9日に獄死した。戸坂には、岩波版『カント著作集』に収録された『自然哲学原理』(1928年)の翻訳がある。戸坂もまた、新カント学派の影響下で哲学研究の道に進み、当初は「範疇としての空間について」などの諸論考でカントの空間論に着眼して、その新たな空間論解釈に取り組んだ。その後、唯物論研究会の創設に加わるなど、マルクス主義に傾倒したが、『日本イデオロギー論』(1935年)でもカントの「常識」概念や二律背反に着目していた。戸坂は、カントの理論哲学の重要概念を日常的な実践的概念として解釈しなおすことで、社会的影響力を発揮しようと試みたようである。これらの戸坂の論考の大部分は、『戸坂潤全集』(勁草書房、全5巻＋別巻、1966-79年)に収録されている。ちなみに、三木清、戸坂潤、そして和辻哲郎の蔵書は、後に総長を務めた谷川徹三の尽力により、本学図書館が所蔵している。

ところで1928年に発足した法政大学哲学会は、岩波書店から『哲学年誌』(創刊号、1931年)を刊行しており、三木・戸坂の論考とともに池島重信の「マックス・シェーラーに於ける哲学の方法」も掲載され、谷川徹三が編集後記を執筆した。『哲学年誌』は、当時の日本の学会にも大きな影響を及ぼしたと言われている。また哲学会主催による西田幾多郎の公開講演会開催や文学部主催の公開講演会などには学外者が詰めかけ大盛況となり、新聞でも取り上げられるなど、昭和初期の「法政学派」とも呼ばれる文学部及び哲学科の「黄金時代」を築いた。ちなみに、哲学科心理学専攻では、城戸幡太郎が中心になりカント『判断力批判』の研究会活動から発展して、1929年（昭和4年）に「法政大学児童研究所」が設立された。この活動は、当時の官学には見られない教育研究活動の成果の一つである。

ところが、意外なことに日本で最初に刊行されたカントの著作の翻訳書は、主著の『純粋理性批判』『実践理性批判』『判断力批判』のいずれでもなく、1914年（大正3年）に桑木厳翼・天野貞祐の共訳による『プロレゴーメナ(*Prolegomena zu einer jeden künftigen Metaphysik, die als Wissenschaft wird auftreten können,*1783)』であった。この書の訳書名は『哲学序説』（東亜堂）であった。1918年（大正7年）には、波多野精一・宮本和吉訳『実践理性批判』（岩波書店）が刊行された。また、1919年（大正8年）に安倍能成・藤原正共訳『道徳哲学原論』（『人倫の形而上学の基礎づけ』）が岩波書店から相次いで刊行さ

れた。これらは、すべて後に岩波版『カント著作集』が出版された折、それに編入されている。ちなみに、カントの著作集ないし全集の類は、岩波版『カント著作集』（全 18 巻：1923-1939 年）が最初であっただけに、日本の哲学・思想界に大きなインパクトを与えた。また、二つ目の企画が第二次世界大戦後に企画・編集された理想社版『カント全集』（全 18 巻 :1965-1988 年）である。そして三つ目の著作集・全集は、筆者が企画し編集責任者の一人を務めた岩波版『カント全集』（全 22 巻＋別巻 1：1999-2006 年）である。これらの著作集や全集の刊行は、それぞれが、その時代の要請に応じて、日本のカント哲学及び哲学研究に大きな影響を与えてきた。

カント生誕 200 年記念企画のうちで特筆すべきことは、『思想　カント記念号』（岩波書店、第 30 号、大正 13 年 4 月 1 日発行）の巻末に、岩波書店の刊行物の広告・宣伝に加えて、法政大学文学部の広告が掲載された点にある。その巻末で、「法政大学は、……二年前からよい文学部を設け、文学部哲学科を分ち、……哲学科に哲学・倫理学・心理学の主な科目を配し」ている、と宣伝し、「文化史、哲学特殊研究、哲学演習（和辻哲郎）、心理学、倫理学史、倫理学演習（高橋穣）、倫理学、西洋哲学史、哲学概論（安倍能成）、認識論、論理学（山内得立）、哲学演習（出隆）」など錚々たる教授陣を紹介している。これらの哲学者は、多くが当代第一級の哲学研究者でカント研究者でもあり、東京帝国大学の教授陣と比べても遜色なく、当時の法政大学と岩波書店、そして夏目漱石と法政大学文学部との深い関係を窺わせる資料としても、今日意義のある有益な文章である。

３．1960 年代以降の教授陣の活躍―ドイツ哲学の著作活動及び翻訳の業績を中心に

第二次世界大戦の敗戦を経て、また 1960 年代の哲学科の「助手問題」やいわゆる学園紛争の時代を経験して、文学部哲学科では 1970 年代になると教授陣の大幅な交代があった。新たに加わった教授陣のうちドイツ哲学関係では、カント倫理学の研究者・浜田義文教授は『若きカントの思想形成』（勁草書房、1967 年）『カント倫理学の成立』（勁草書房、1981 年）『カント哲学の諸相』（法政大学出版局、1994 年）などを刊行し、カントやヘーゲルの研究でも知られた山崎正一教授は『カントの哲学－後進国の優位』（東京大学出版会、1957 年）などの業績を残している。その次の世代では、筆者等による岩波版『カント全集』(全 22 巻＋別巻 1) の編集・校閲・執筆やカント『判断力批判』(8 巻 :1999 年。9 巻：2000 年) の個人訳と単著『カントを読む　ポストモダニズム以降の批判哲学』(岩波書店、2003 年)、編著『カント事典』(弘文堂、1997 年)、単著『カント純粋理性批判の研究』（法政大学出版局、1989 年）『岩波人文書コレクション　カントを読む』（岩波書店、2014 年）、『東アジアのカント哲学』（法政大学出版局、2015 年）『新・カント読本』（法政大学出版局、2018 年）など多数のカント文献を刊行してきた。また、ほぼ同年代の笠原賢介教授によるフランクフルト学派の代表者・アドルノ著『本来性という隠語』の個人訳（未來社、1992 年）、山口誠一教授の『ヘーゲル哲学の根源』（法政大学出版局、1989 年）、菅沢龍文教授らによる共訳書のマンフレッド・キューン著『カント伝』（春風社、2017 年）などドイツ近現代哲学の紹介や研究がある。

カント哲学との関連で特筆すべきことは、ニーチェと同時代の哲学者ヴィルヘルム・ディルタイ（Wilhelm Dilthey,1833-1911）の日本の哲学研究に対する影響関係である。ディルタイは、ドイツのアカデミー版『カント全集』の企画・編集者としてカント研究の礎を築いた人物である。彼は、ハイデガーの解釈学的哲学に先立って、哲学の世界に解釈学的方法を導入したこともあり、日本では西田幾多郎が注目して以来、京都学派の哲学者たちに少なからぬ影響を与えた。かつて三木清はいち早くディルタイ哲学、特に哲学的解釈学の意義に着目した。このことは、卒業論文「批判哲学と歴史哲学」(『哲学研究』第 54 号、1920 年 / 大正 9 年 9 月）の中でカントの理性批判の限界を指摘して、「その自然概念と自由概念とを媒介するものは「歴史的理性の批判」でなければならない」（全集第 2 巻、p.58）と主張していたことからも明らかである。論文「ディルタイの解釈学」(同巻、pp.159-204. 近代社 1928 年 2 月）では、歴史的意識や歴史科学と精神科学の基礎づけの試みとして、ディルタイ解釈学における「歴史的理性の批判」の意義を強調していた。

『三木清全集』第 5 巻所収の成熟期の諸論考「世界観構成の理論」（初出『理想』第 39 号、1933 年）「精神史方法論」（初出『世界精神史講座』第 2 巻、1941 年 / 昭和 16 年 3 月）などでは、ディルタイ晩年の著作『世界観学』（1911 年）や『解釈学の成立』（1900 年）における歴史理解と解釈学的方法との対話・対決が展開されている。諸論考の執筆時期に応じて、カントとディルタイに対する評価に変化があったとはいえ、三木清の哲学的思索の意義を正確に理解する上でも、彼らは重要な哲学者であった。

三木清の没後、1946 年 (昭和 21 年）に西田幾多郎の高弟・三宅剛一たちの編集によって、『ディルタイ著作集』(創元社、全 15 巻＋別巻 1) の刊行が開始された。第一回配本・第 4 巻『歴史的理性批判』刊行時には、三木清の師の西田幾多郎（1945 年 6 月死去のゆえ、生前に執筆）やかつて本学で教鞭をとった伊藤吉之助などが「推薦の辞」を寄せており、第 8 巻『体験と詩作』の校閲者には、漱石門下で哲学科創設時教授に着任した小宮豊隆が名を連ねていた。しかし、この企画は第 4 巻一冊が刊行されただけで中断した。ちなみに、小宮豊隆が校閲者を務めることになっていた本著作集第 8 巻『体験と詩作』は、のちに『体験と創作』として岩波文庫に収録され刊行された（上・柴田治三郎訳、下・小牧健夫、柴田治三郎訳、上下 1961 年)。訳者の柴田治三郎によれば、小宮豊隆は、この翻訳作業の過程で、共訳者の小牧健夫没後、柴田治三郎が「小宮先生のお宅にかよい、原文と訳の読合せをしていただいた」（下、「訳者後記」p.245）との記述にあるように、『ディルタイ著作集』の企画が潰れた後でも、いわば影の共訳者・校閲者としての役割を果たしたわけである。

こうした運命に翻弄された『ディルタイ全集』の日本語版は、紆余曲折を経て、筆者等が編集責任者となり、2003 年以降、新たな企画により『ディルタイ全集』(法政大学出版局、2020 年現在、第 1 巻から第 10 巻まで刊行済) の刊行が開始された。目下、筆者は企画・編集校閲者として、本全集の編集代表を務める立場上、先達の小宮豊隆と同様の黒衣役を務めている。いずれにしても、本学の誇るカント研究を中心

にしたドイツ哲学の伝統は、漱石山脈とその地下を流れる伏水のごとく連綿と後続の世代に引き継がれている。

4. ＜叢書・ウニベルシタス＞と本学の教授陣との関係

ここでやや視点を変えて、日本の哲学・思想に大きな影響を与えてきた＜叢書・ウニベルシタス＞と本学の教授陣との関係に立ち入ってみよう。

＜ウニベルシタス・シリーズ＞は、法政大学出版局刊行物の総点数の約4割を占める出版局の柱であり、最大の看板である。出版局の刊行目録によれば、本叢書の第1番は1967年刊行、約20年後の1988年に251番を刊行、その後500番は1995年、2008年に900番（ちなみに、本号は筆者監訳書のトム・ロックモア『カントの航跡のなかで　20世紀の哲学』）、2013年に1000番の刊行を達成した。2020年現在、1110番に達している。したがって本叢書は1年間で約21冊のペースで刊行され続けたわけである。これは大変な業績である。国内の大学出版界を見ても、人文・社会科学系のこれほど幅広い諸領域をカバーする刊行物は他に類を見ない。グローバルに見ても、50年の間これだけ多くの書物を継続的に刊行した実績は稀であろう。

また、本シリーズは、人文・社会科学系を中心にした実に多様な分野の古典文献の翻訳書だけでなく、優れた二次文献の翻訳書から成る点に大きな特徴がある。特に哲学・思想・文化・宗教等の古典文献については、編集部の先見性は高く評価されてよい。例えば、1968年第6番は、ヴィトゲンシュタイン著『論理哲学論考』の翻訳書であった。この文献は、大修館『ウィトゲンシュタイン全集』第一巻所収（1975年刊）に先立って刊行されている。文学の分野では、カネッティの作品の翻訳を数点手掛けてきた。それらは、すべて彼がノーベル文学賞を受賞する前のことである。ポストモダンやそれに対する批判的な立場の論考も多数収録されている。ウニベルシタスは、漆黒の夜空を照らすきら星のように、哲学史・思想史に重要な位置を占める人類の英知のコンステラチオーン（輝かしい知の星座）である。本シリーズの重要性は、今日では教養と専門との乖離が当然のことのように受容されている世相の中で、両者の知を渾然一体の形で読者に提供し続けてきた点にある。さらに本叢書は、第二次世界大戦後の人文科学・社会科学の分野で、グローバルな観点から欧米の先進的な知をいち早く紹介・受容することによって、日本の幅広い知的領域に刺激的な影響を与え、学問の進展に大きな役割を果たしてきた。

法政大学出版局は2018年に創設70年、人間で言えば、古希を迎えた。法政大学出版局の刊行物には、文学部哲学科の教授や旧教養部の教授も翻訳・執筆活動に積極的に携わった。本叢書の発足段階から旧第一教養部教授山村直資の訳によるR. グアルディーニ著『ソクラテスの死』（8番、1968年）等の訳書が4点あり、哲学科教授浜田義文や筆者等によるカント関連文献の訳書・監訳書は合計7点にのぼる。カント関連の翻訳書について紹介すれば、西牟田久雄・浜田義文共訳のA. グリガ著『カント　その生涯と思想』（1983年）や筆者監訳によるT. ロックモア著『カントの航跡のなかで　20世紀の哲学』（2008年）など20世紀ドイツ哲学や英

米系の哲学・倫理学・宗教・思想史関連の書物の翻訳に尽力してきた。近年ではハイデガーやハンナ・アーレント関係の二次文献の翻訳も盛んである。これらは、学部生や大学院生の授業の参考文献として、また学位論文の重要文献としても活用されている。さらに本学が和仏法律学校として発足した時期の中心人物、フランス法学者ボアソナード博士は、日本の拷問制度廃止に尽力した自由で進歩的な研究傾向を本学に植え付け、その学問的影響が法政大学出版局の刊行物、特に本叢書収録文献類（フランクフルト学派の訳書等）にも、その伝統はいまなお根付いている。これらは、本学及び日本の大学の研究教育の進歩発展に大きく寄与している点にも、触れておかなければならないであろう。

本叢書には、大著『希望の原理』の著者、エルンスト・ブロッホ（Ernst Bloch,1885-1977）の諸著作（『哲学の根本問題』35 番 1972 年、『キリスト教の中の無神論』上･下､71/72 番 1975 年、『チュービンゲン哲学入門』401 番、1994 年、『世界という実験』641 番、1999 年）も早い段階から翻訳･紹介されている。筆者は、本シリーズが、混迷する現代という暗い時代の人々にとって＜希望の星＞となり、導きの指針としての役割を今後も果たすよう、強く願っている。

5.「カント・コレクション」寄贈の経緯と法政大学文学部創設 100 周年を目前にして

まず、退職を機に、筆者が本学に寄贈したカント関連の書物や胸像・記念硬貨、記念の文献類について、簡単に紹介したい。筆者は、下記のディルタイの初版本などを含むカント関連の書籍や胸像・写真集・カント生誕・没後の記念刊行物などを便宜上「カント・コレクション」と称している。ここでは、紙幅の制約上、その一部についてのみ紹介することにとどめる。

（1）カント胸像レプリカ　＜写真①＞

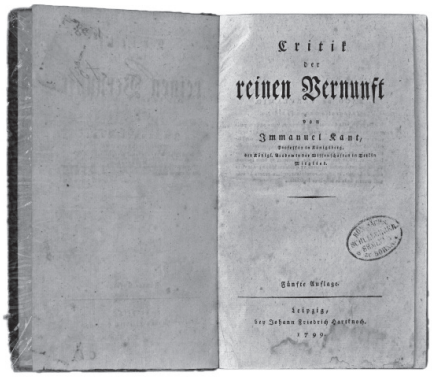
＜写真①＞

本物はドイツ･ベルリン博物館所蔵:1798 年、Emanuel Bardou 製作。

現存するカントの胸像のうちで、壮年期のカントをモデルにした有名な胸像であり、本ミュージアム所蔵のレプリカは、ドイツ以外には日本に存在するこの胸像だけである。そのためであろう。国内外のカント文献には、この胸像の写真が口絵などに多く使われてきた。

（2）カントの著作（ドイツ語原典）

①『純粋理性批判』第二版・1787 年刊行の第 5 版（1795 年刊行）＜写真②＞

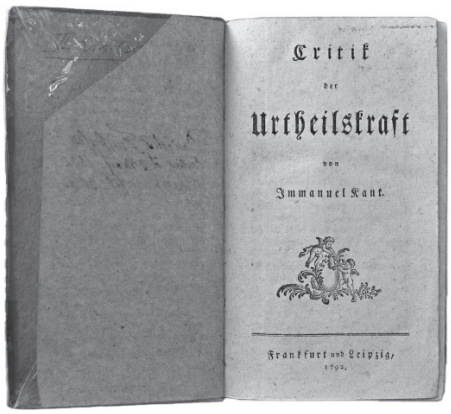


＜写真②＞

カント成熟期、いわゆる批判期の第一の主

著『純粋理性批判』第一版（*Kritik der reinen Vernunft*,1781）は、初版が 1781 年に刊行された。本書刊行直後、ドイツの哲学・思想界ではカントの意図が理解されず、彼の超越論哲学はバークリー流の主観主義的観念論であると誤解された。そこでカントは、カテゴリの演繹論の部分を始め主要な論述を書き換えて刊行した。それが『純粋理性批判』第二版 (*Kritik der reinen Vernunft*,1787) である。本書は、1795 年に刊行された、その第 5 版の現物である。ちなみに、ショーペンハウアー（Arthur Schopenhauer,1788-1860）やハイデガーは『純粋理性批判』第一版（初版 1781 年）を評価し、他方、第二版（初版 1787 年）を評価したのが新カント学派や、その後の多くのカント研究者たちであった。

②『判断力批判』（初版 1790 年刊行）の第 2 版（1792 年刊行）　＜写真③＞



＜写真③＞

かつてゲーテやディルタイが高く評価したカントの目的論は、『判断力批判』（*Kritik der Urteilskraft*,1790）の第二部門「目的論的判断力の批判」で詳しく論じられた。その第一部門には、今日再評価が進んでいるハンナ・アーレントやフランスのポストモダンの代表的哲学者ジャック・デリダらが注目した「美感的判断力の批判」が収録されている。特に近年は、美学論以上に、崇高論に対する研究が国内外で盛んである。

（３）記念硬貨

＜写真④⑤＞

＜写真④＞カント生誕 250 年記念硬貨（ドイツ連邦共和国：旧西ドイツ発行・5 マルク硬貨）

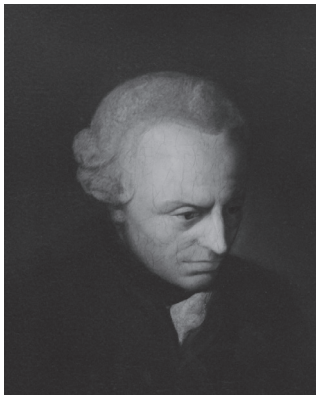
＜写真⑤＞カント生誕 250 年記念硬貨（ドイツ民主共和国：旧東ドイツ発行・20 マルク硬貨）

東西ドイツ統一以前、カント生誕（1724 年 4 月 22 日生）を記念して 250 周年（1974 年）に、旧西ドイツと旧東ドイツで発行された最後の生誕記念硬貨である。なお、カント没 200 年の 2004 年には、母国のドイツに限らず、ヨーロッパ諸国や日本・中国・韓国などでも、カントの業績を称える諸行事が実施され、多くの刊行物が出版された。だが、ヨーロッパ連合（ＥＵ）の統一貨幣であるユーロ導入のためか、カント没 200 年記念硬貨は発行されなかったようである。

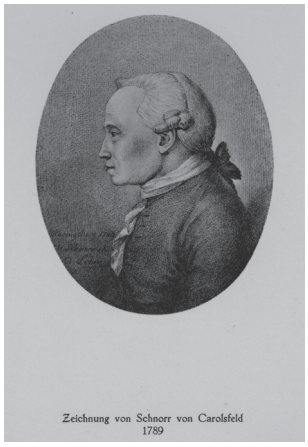
（4）生誕 200 年記念・カント肖像画・写真集（ケーニヒスベルク、1924 年刊行）

＜写真⑥⑦⑧＞

＜写真⑥＞ Zeichnung von Puttrich, vor 1798



＜写真⑦＞ Gemälde aus dem Dresdener Kunsthandel, um 1790



＜写真⑧＞ Zeichung von V.H. Schnorr von Carolsfeld, 1789

カント生誕 200 年に合わせて 1924 年に、ケーニヒスベルク大学芸術史の私講師・カール・ハインツ・クラーセン博士 (Dr. Karl Heinz Clasen) 編纂による『カント肖像画集』(*Kant=Bildnisse*) を同市の支援によりカント・ゲゼルシャフトのケーニヒスベルク地方支部が刊行した。この画集には、クラーセン博士による収録肖像画や写真などの解説文があり、本書がカントのほぼ唯一のまとまった『カント肖像画集』であるという点で、貴重な文献であることが記されている。その中には 1798 年に、Emanuel Bardou によって製作されたカントの胸像の写真も含まれている。ちなみに、岩波書店版『カント全集』各巻の口絵として使ったカントの肖像画などは、すべて筆者所蔵のカント文献及び『カント肖像画集』によるものである。

（5）『判断力批判への第一序論』・ファクシミリ版（20 世紀の主要なドイツ系哲学者の自筆サイン入り、1965 年刊行）。

本書は、ヴァイシェーデル版『カント著作集』(*Kant-Werkausgabe in 6 Bänden.* Wissenschaftliche Buchgesellschaft, Darmstadt1956.1960 im Insel-Verlag) の編者として著名なヴィルヘルム・ヴァイシェーデル（Wilhelm Weischedel,1905-1975）生誕 60 年記念に刊行された『判断力批判への第一序論』清書原稿（清書者はカントの弟子のキーゼヴェッターと言われている)のファクシミリ・写本版である。この書物の第一の特徴は、まずこの点にある、と言ってよい。本書の編者の一人であるカント研究者のノルベルト・ヒンスケが、巻末収録の「テクストの歴史について」の

中で、カントの生前・死後、長い間刊行されなかった『第一序論』が出版されるまでの経緯を記している点でも、カント研究史上貴重な文献である。

本書の第二の特徴は、冒頭部分に 1960 年段階で、世界的に著名な存命のドイツ系哲学者・神学者・思想家たちの自筆による署名が 134 名収録されている点である。これには、ヴァイシェーデルの経歴の影響が反映されている。彼は、プロテスタント神学や実存哲学を学び、第二次世界大戦中に、反ナチスの立場からドイツやフランスの抵抗運動に協力した。戦後は、ベルリン自由大学の教授を務め、独自の哲学思想の構築に努めた。そうした経緯もあり、テオドール・アドルノやマックス・ホルクハイマー、ユルゲン・ハーバーマスらのフランクフルト学派の哲学者・思想家やユダヤ系の哲学者のアーレントやその最初の夫ギュンター・アンダラス、エルンスト・ブロッホ、実存哲学者のカール・ヤスパース、アーレントの学部時代の指導教授マルティン・ハイデガー、現象学派のオイゲン・フィンク、解釈学的哲学の泰斗ハンス - G．ガダマーやヨアヒム・リッター、カント哲学の研究者としては、ディーター・ヘンリッヒ、ゴットフリート・マルティン、ノルベルト・ヒンスケ、神学者のルドルフ・ブルトマン、パウル・ティリッヒ、哲学者で物理学者としても著名なカール・フリードリッヒ・フォン・ヴァイツゼッカー（戦後ドイツの大統領を務めたリヒアルト・フォン・ヴァイツゼッカーの兄）など、20 世紀の巨人たちが綺羅星の如く署名を寄せており、現代哲学史の一面を垣間見るような壮大な景観が展開されている。

（6）カント没後 150 年記念論文集（1954 年、マックス・ホルクハイマー他、フランクフルト大学）

第二次大戦後の東西ドイツの分断のなかで、再建されたフランクフルト学派の人々が中心となって、カント没後 150 周年記念の論文集を編集し公刊した。ナチス・ドイツの政権下でアメリカに亡命していたマックス・ホルクハイマーは、ナチス崩壊後、ドイツに戻り、フランクフルト大学社会研究所を再建した。彼は、同僚のアドルノとの共著『啓蒙の弁証法』で著名となったが、彼の若い頃の哲学研究は主にカントに向けられており、特に彼の関心は『判断力批判』の第二部・目的論的判断力の批判にあった。ちなみに、彼の学位論文も教授資格論文も、ともにカントの『判断力批判』の第二部・目的論的判断力に関連したテーマを扱っている。したがってホルクハイマーの研究経歴から見れば、カントの記念論文集への寄稿は少しも奇異なことではなく、むしろ自然の成り行きであったとも言えよう。

（7）ドイツ・アカデミー版『カント全集』編集委員長の Wilhelm Dilthey の主著初版本

①『精神科学序説 第一巻』（*Einleitung in die Geisteswissenschaften,* Band 1.1883.『ディルタイ全集』第 1 巻所収・日本語版『ディルタイ全集』第 1 巻）

ディルタイは、ヘーゲルが生前就いていたベルリン大学哲学部の正教授に着任して間もなく、本書によってカント哲学の中心概念である「純粋理性批判」を超克する「歴史的理性批判」の試みを企図した。ディルタイは、カントの「理性批判」の試みをモデルとして、当時論

争となっていた自然科学と精神科学との学問的な区別とともに、精神科学の基礎づけを「歴史的理性批判」の試みによって果たそうと企てた。『精神科学序説』は、その試みを宣言した記念碑的な著作である。ちなみに、英語版『ディルタイ著作集』（1985-2019）の編者・訳者を務めたR. マックリールによれば、新カント学派のヴィンデルバントやリッケルトは新フィヒテ学派であって、ディルタイこそ、新カント学派と呼ばれるべきである、と主張している。哲学史の通説を覆すディルタイ評価は、三木清の後期のディルタイ評価と一脈通じる面があるようにも思われる。

②著名な『体験と創作』の初版 (1906 年刊行、405 頁)

この著作によって、ディルタイは、それまでドイツの文学研究が理念史及び哲学的な課題を叙述したものと認識されていなかった傾向を大きく転換させた。この論文集の初版では、1860 年代から 70 年代に執筆された論考、ノヴァーリス論、レッシング論、ゲーテ論、ヘルダーリン論の 4 編から成る。この著作は、世に歓迎され版を重ねた。当時の欧米や日本の思想界では、「体験」（Erlebnis）が流行語になったが、その源泉は、ディルタイの『体験と創作』(*Das Erlebnis und die Dichtung,*1906)のキーワードである「体験」の影響によるところが大きいと言われている。ディルタイのこの著作の登場によって、文学は精神史的な研究と不可分であり、文学と哲学とは不可分な関係にあることが自覚されるようになった。

『哲学的文学』（三笠書房、1941 年）を含む谷川徹三の諸業績は、こうした観点から見た時、その重要性がいっそう明らかになる。例えば、「生の哲学」（初出・岩波講座『哲学』第 18 巻、1933 年 / 昭和 8 年）の執筆やジンメル著『カントとゲェテ』（Georg Simmel, *Kant und Goethe,*1906、新版：岩波書店、1928 年）の翻訳は、上記のディルタイの哲学的思索の営みと重なり合う性格をもつものであろう。三木清は、「哲學と文藝」の冒頭を「哲學と文學とは根本において同じ問題をもつてゐる」（『三木清全集』第 12 巻、p.194）という文章で始め、論文の最後を「かくて一定の時代の研究者にとって文學は哲學の註釋として役立ち、哲學はまた文學の註釋として役立つという關係が見出されるのである」（同巻、p.199）、という文章で締めくくっている。哲学と文学との密接不可分の関係に対する三木清のこの主張は、谷川徹三の見解と重なり、ディルタイの洞察とも一致するものであろう。

③『体験と創作』の増補改訂版･第二版 (1907 年刊行、455 頁)

ディルタイは、『体験と創作』初版が好評であったため、初版所収の古い論考に新たに大幅な加筆修正を加えて増補改訂版を刊行した。それが翌年刊行した第二版であった。レッシング論の増補を始め特にディルタイのゲーテ論は、彼がこの著作の核心部分とみていたので、大幅な増補改訂となった。その後、ディルタイは第三版も出版しており、彼の死後、現在まで 15 版が刊行され、文字通りのロングセラーとなった書物である。

本学の戦前・戦中の教授陣に対するディルタイの影響については、すでに言及したように西田幾多郎や和辻哲郎、三木清、戸坂潤、谷川徹三などもディルタイについて触れた論考があった。カントの「理性批判」の試みを新たな文脈

から「歴史的理性批判」の構想に取り組んだディルタイの哲学には、哲学者以外にも、小宮豊隆のような文学系の人たちも魅了された事実を忘れるべきではない。上述のように、小宮もまた、ディルタイの『体験と創作』の翻訳・紹介に尽力した人物の一人であった。本学の教授陣は、カント哲学の新たな展開を意図して哲学・文学・美学・歴史学・心理学・政治学など精神諸科学とその基礎づけに生涯を捧げたディルタイにも、的確に目配りしていたのである。

（8）アカデミー版『カント全集』に対するディルタイの功績

カント研究に対するディルタイの功績については、主として次の二点を指摘することができる。第一は、アカデミー版『カント全集』の企画編集の業績である。ディルタイは、カント哲学の重要性に着目して、当時のドイツの哲学者をいわば総動員して遺稿や講義ノートの類を含めた完璧な『カント全集』を刊行しようと企図した。ディルタイの主要な編集方針は、次のとおりである。彼は、カント思想全体の正確な理解のために、四部構成による全集の編集方針を提示した。第一部はカントの生前に刊行された著作類である。第二部は往復書簡集。第三部は遺稿集。第四部は講義録である。ディルタイ自身が寄稿した序文を含む第1巻の刊行以降(1900ff.)、全29巻に及ぶ全集の刊行は、21世紀に入っても続いてきた。

ディルタイの第二の功績は、カントの死後長い間明らかにならなかった『判断力批判への第一序論』（以下、『第一序論』と略記）の存在とその重要性に光を当てたことにある。カントは、当初計画した序論があまりに冗長になっているので、短縮しなければならないと考えて、それを大きく書き換えた序論を収録した『判断力批判』を刊行した。短縮前の序論が、のちに『第一序論』と呼ばれた論考である。この論考は、執筆後約120年の歳月を経て、ディルタイによって、『哲学史叢書』（*Archiv für Geschichte der Philosophie,* Band II,1889）の中で、それまでの経緯が明らかにされている。しかし、ディルタイ存命中には『第一序論』はアカデミー版『カント全集』で公刊されず、1914年にかつてディルタイが学位審査委員の一人を務めたエルンスト・カッシーラー編集による『カント全集』第5巻に収められ、初めて『第一序論』というタイトルで全文が完全な形で公刊された。

これらの詳しい経緯は、上述の生誕60年記念に刊行された『判断力批判への第一序論』清書原稿のファクシミリ・写本版の巻末での「テクストの歴史」として説明されている。

結論　カント哲学及び平和論のグローバルな展開に向けて

本学憲章の理念「自由を生き抜く実践知」は、個人の自由を保障する「平和」の思想とも深くかかわっている。そこで筆者は、「永遠平和のために」を唱道したカント哲学のグローバルな展開に触れて、本稿の結論に代えたいと思う。

そのための有益な資料として、筆者の編著『新・カント読本』刊行の狙いについて、簡単に紹介しておきたい。国際連盟や欧州連合のモデルともなったと言われるカントの平和論の再評価とともに、筆者は、21世紀のカント哲学のグローバルな展開の成果を新たな発想で企画編集し刊行した。本書第一部「カント哲学のグ

ローバルな展開」では、１．フランス語圏のカント受容、２．英米圏のカント研究、３．スペイン語圏のカント研究、４．イスラーム文化圏のカント研究、５．漢字文化圏のカント研究、６．ロシアのカント研究、７．ドイツ語圏における現在のカント研究、そして [コラム①] 夏目漱石とカント。以上の特集を編んでみた。『読本』シリーズに限らず、類書のない新たな企画によって、筆者は、文字通りカント哲学受容のグローバルな展開の最新状況を読者に提供するとともに、本学の哲学研究、特にカント哲学を中心にしたドイツ哲学の研究に努めた教授陣の業績が 21 世紀における「知の地球儀」にどのように位置づけられるかを提示してみたかったのである。

近年、国内では文系学問の不要論・廃止論が高まり、大学における科学技術研究の民生利用と軍事利用との「デュアルユース」（Dual use）をめぐる論争とともに、各大学の態度表明が迫られてきた。そうした中で、本学はいち早く科学技術研究の軍事利用に対する慎重な立場を表明した。これは、多様性を認め合う「自由な学風」の伝統に根差した「自由を生き抜く実践知」の現れであり、哲学者カントの永遠平和の理念とも合致する見解である。実際、本学の総長を務めた谷川徹三は、戦後間もなく『平和の哲学　世界連邦政府運動のために』（社会思想研究会出版部、1953 年）を刊行して、核廃絶と平和を訴える「科学者京都会議」にも参加した。ちなみに本会議の呼びかけ人の一人・朝永振一郎の父親は、『カントの平和論』（改造社、1922 年）を上梓した朝永三十郎であり、この書物は日本最初のカント平和論研究の記念碑的な著作であった。

こうしてみると、本学の哲学的伝統は、カント及びドイツ哲学の研究に取り組んだ教授陣の批判的精神と共鳴し継承しつつ、新たな時代を切り開く糧を与えてきたとも言えるであろう。大学は、社会の中で存続し、社会とともに存続し、次の時代を担う世代を教育しつつ社会を導く指導者としての役割も果たしてきた。そして今後も、グローバルな規模で、そうした役割を果たしていくはずである。本稿がその歩みの一端を照らし出すことが出来たとすれば、筆者としては、望外の幸せである。

＜主要参考文献＞

『法政大学百年史』（法政大学百年史編纂委員会編集、1980 年）
『雑誌法政』所収「＜蔵書紹介＞「三木文庫」について」(牧野英二執筆、法政大学、1989 年 9 月号)
『雑誌法政』所収『法政大学の歴史＜その 83 ＞法政大学とドイツ哲学』(牧野英二執筆、法政大学、2005 年 9 月号)
『図書』所収「和辻哲郎の「書き込み」と「断簡」」（牧野英二執筆、岩波書店、2009 年 9 月号）
『西田幾多郎全集』（岩波書店、旧版全 19 巻 1947-53 年。新版全 24 巻 2002-2009 年）
『戸坂潤全集』（勁草書房、全 5 巻 1966-67 年。別巻 1979 年）
『三木清全集』（岩波書店、第二刷全 20 巻 1984-1986 年）
『和辻哲郎全集』（岩波書店、全 20 巻 1961-63 年。増補版全 25 巻＋別巻 2,1989-1992 年）
『カント全集』（岩波書店、全 22 巻＋別巻 1,1999-2006 年）
『ディルタイ全集』（法政大学出版局、全 11 巻＋別巻 1,2003ff.）
谷川徹三・東畑精一編『回想の三木清』（文化書院、1948 年）
「河野先生の思い出」刊行会『回想　河野与一　多麻』（岩波ブックセンター信山社、1986 年）

カント『判断力批判』上･下（岩波版『カント全集』８巻・９巻、岩波書店、牧野英二訳・訳注・解説、1999 年 -2000 年）。
ディルタイ『精神科学序説Ⅰ』（法政大学出版局、『ディルタイ全集』第１巻、牧野英二編集校閲･訳･解説、2006 年）
『増補・和辻哲郎の書き込みを見よ！　和辻倫理学の今日的意義』（牧野英二著、法政大学出版局、2010 年）
『「持続可能性の哲学」への道　ポストコロニアル理性批判と生の地平』（牧野英二著、法政大学出版局、2013 年）
『叢書・ウニベルシタス　1000 番到達記念ブックレット』「「希望の星」としての＜ウニベルシタス＞」(牧野英二執筆、法政大学出版局、2014 年２月)
『東アジアのカント哲学』（牧野英二編著、法政大学出版局、2015 年）
『新･カント読本』（牧野英二編著、法政大学出版局、2018 年）

（まきの・えいじ　法政大学名誉教授）

One Aspect of University History: Professors of Hosei University and the “Kant Collection”

Eiji Makino

Abstract

The author elucidates the important role that professors in the Faculty of Letters of Hosei University have played in the study of Kant’s philosophy in Japan.

First, throughout the Meiji, Taisho, Showa, Heisei, and Reiwa periods, professors of Hosei University have played an active and important role in translating, introducing, and researching Kant’s philosophy. In this paper, the author introduces the major relevant research achievements.

Second, when the author retired from Hosei University, he donated his “Kant Collection” to Hosei Museum. Therefore, he will take this opportunity to introduce the main contents of this collection, including busts and commemorative coins of Kant and copies of Kant’s major works.

Third, the author will clarify the close relationship between research on Kant by professors at Hosei University and Iwanami Shoten. Since the establishment of the Faculty of Letters, the professors of this university have maintained a close relationship with this publishing company regarding the publication of translated books related to research on Western philosophy, especially Kant’s philosophy, introductory books, research books, and so on; a similar relationship was maintained between Soseki Natsume’s disciples and Iwanami Shoten before the founding of the faculty. In addition, this paper will introduce the activities of Hosei University Press in the “Universitas Series.”

Last, the author also clarifies that professors in the Faculty of Letters have continued Kant’s tradition of peace studies, which is also associated with “Practical Wisdom for Freedom” as set out in the Hosei University Charter.

Keywords: Kant’s philosophy, Kant Collection, Iwanami Shoten, Peace Studies